

活動報告2-1 特別研究員 令和元（2019）年度

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター 公開日: 2020-12-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15014/0000000356

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0
International License.



■ 藺田 郁「近代日本における大衆的な語り芸の生成と展開に関する研究—唄・踊り・芝居の結びつきを手がかりに」

本年度は前年度の成果を発展させつつ研究活動を行った。活動内容は主に高知県での現地調査の実施、国会図書館関西館での資料調査、それらの分析考察を元にした口頭・論文による研究成果の発表である。以下、調査研究の対象である西畑人形、説教源氏節（以下、源氏節）、活動人形、それぞれについて活動報告を記す。

西畑人形では、主に高知県での文献調査および関係者への聞き取り調査を行い、節劇人形芝居に関する多くの情報を得ることが出来た。特に県内数か所で行った聞き取り調査では、これまでほとんど知られていなかった複数の浪曲師の活動が明らかになった。これにより、それぞれの浪曲師の活動の違いが複層的に重なり、当地域の浪曲受容が形作られ、そのなかで節劇人形芝居が展開されていることが明らかとなった。そのなかには、高知県を超え、全国的な活動を行う演者や、興行活動に伴う著名な浪曲師との関わりなど、新たな語り芸の展開を見出せた。さらにこれらの調査に加え、国会図書館などでの資料調査により、高知を中心とした節劇の人形芝居を含む浪花節受容の全体像を明らかにした。この研究成果は論文として発表予定である（2020 年度）。また、前年度より実施していた国立民族学博物館所蔵の音源調査の成果として、音源資料（「土佐の民俗音楽」）の紹介と共に節劇に関わる演者の芸歴に着目した口頭発表を行った（東洋音楽学会全国大会）。これは上記の浪花節受容に関する補完的な内容となっている。

源氏節については、これまで収集できた音源および文献資料を通じて、源氏節女芝居の興行形態について解明を進めた。特に現存する源氏節女芝居の SP レコード音源のなかに、源氏節の語り芸だけでなく、複

数の流行り唄、俗曲などが吹き込まれていることに注目し、それらの音源から、源氏節が浪花節などに関わりのある特徴を有している一方で、後に隆盛する少女歌劇の形態にも繋がる可能性があることを検討した。これらの成果の一部は、ヨーロッパ日本研究協会（The 3rd EAJS Conference in Japan）において発表し、また語り芸の源氏節については、関東の説経節を扱った報告書（下記、関連する執筆参照）の論考において、近代における語り芸の展開としてその特徴を提示している。

活動人形は、国会図書館などで新聞資料による興行記録の調査を集中的に行った。東京での新たな興行記録のほか、外地（台湾）での記録も確認することが出来、より具体的な活動実態への解明に近づくことができたことが主な成果である。

本年度も含め、ここ数年間で各地域の一定の研究成果が出揃いつつあり、並行して実施している科研費事業の最終年度に向けて、今後はこれまでの成果を纏めていく予定である。

◆関連する執筆

- * 2019.11「浄瑠璃における石橋山の合戦と真田」第 55 回公開講座（令和元年度第 1 回）「語りの立体化そして復曲—狂言、能、題目立—」パンフレット。
- * 2019.12『初めて学ぶ芸術の教科書 伝統文化 入門編』（井上治編）京都造形芸術大学東北芸術工科大学出版局芸術校舎、第三章「文楽」を担当。
- * 2020.03「説経節の展開と車人形—明治以降を中心に」『記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財 八王子車人形調査報告書』（八王子市教育委員会編）、第五章「論考」第三節を担当。

◆関連する口頭発表

- * 2019.09.05 “The contact zone of premodern and modern styles on popular entertainment around the 1900s : Music and dance in *Genji-bushi Onna-shibai*”, The 3rd EAJS Conference in Japan, University of Tsukuba.
- * 2019.11.16 「『土佐の民俗音楽』と西畑人形を事例に」『民博所蔵東洋音楽学会調査記録資料の意義と今後の活用』、東洋音楽学会第 70 回大会、京都市立芸術大学

◆講義・講座

- * 2019.04-2020.03 日本伝統音楽演習 d I・II・III・IV
- * 2019.09.05 平成 31 年度第 5 回伝音セミナー「大衆演芸にみる芝居と流行り唄」日本伝統音楽研究センター

◆資料・調査

- * 2019.08.23-2019.08.25 高知県土佐市、および高知市にて西畑人形に係わる現地調査
- * 2019.09.14-2019.09.15 高知県土佐市、および高知市にて西畑人形に係わる現地調査
- * 2020.02.01-2020.02.03 高知県土佐市、および高知市にて西畑人形に係わる現地調査
- ◆対外活動
- * 2019.04-2020.03 大阪音楽大学 非常勤助手
- * 2019.04-2020.03 大阪大学大学院文学研究科 特任研究員
- * 2019.09-2020.03 畿央大学 非常勤講師

出口 実紀「近世の雅楽譜における記譜の特徴と系統に関する研究」

昨年度に引き続き、近世における三方楽所の雅楽譜を対象に、仮名で記された唱歌譜を整理し、各楽家の記譜の特徴と系統を明らかにする研究を継続しておこなった。今年度は、考察の対象を筆楽譜に広げ、雅楽譜の中で唱歌が記される笛譜、筆楽譜の両方を用いて楽家の記譜について考察した。

その成果公開として、令和元年度第10回伝音セミナーにおいて「近世の雅楽譜を見る・聴く」という内容を実施した。セミナーでは、「明治選定譜」を基礎とする現行雅楽譜の様式を確認するとともに、近世の筆楽譜、籠笛譜をそれぞれ提示した。近世の譜については、書写者の記述を手がかりに京都方、奈良方、天王寺方に分類し、孔名譜や母音の表記といった現行譜との共通点、相違点をそれぞれ示した。それを踏まえて、「越殿楽」の譜を例に挙げ、譜によって用いる唱歌が異なることを指摘し、それは「楽所」という大きなまとまりで区別できるものではなく、同じ楽家の譜でも唱歌は異なることを示した。つまり、唱歌の記譜の系統はある程度楽家ごとに分類可能なようにみえるが、実際には書写者の出自や活動拠点といった楽人を取り巻く情報にも目を向けて分析をおこなう必要がある。また唱歌だけでなく、天王寺方の笛譜には京都方、奈良方とは異なる旋律がみられ、笙譜においても奈良方の譜には現行とは異なる合竹が記されていることを考察し、楽器の実演とともに紹介した。今後、整理・分析が終わっていない笛譜について引き続き考察をおこない、筆楽譜についてもさらに調査、収集、

分析を進める予定である。

民俗芸能における研究活動では今年度、岐阜県、奈良県、和歌山県において、各地の祭礼、民俗芸能、年中行事等の調査をおこなった。そのうち、奈良県葛城市による「當麻寺二十五菩薩来迎会」の調査では、今年度報告書を刊行した。報告者は現在の練供養における音楽を担当し、練供養における真言方・浄土方それぞれの楽（雅楽）の役割について執筆した。當麻寺の練供養における楽とは、本来法要の合間や菩薩が来迎橋を渡る際の付楽であり、昔はお渡りを知らせる合図の役割を担っていたことを述べた。その他、2019年9月には草津宿交流館にて「風流踊りの音楽」と題した講演をおこない、草津のサンヤレをはじめ、十津川の大踊りといった事例を挙げて、楽器の役割や詞章と旋律の関係といった音楽の特徴について考察した。

◆関連する執筆

- * 「當麻寺練供養における雅楽の歴史と現状」『當麻寺二十五菩薩来迎会（聖衆来迎練供養会式）調査報告書』（葛城市教育委員会、2020年3月）
- * 「下ヶ流のネギ行事」『岐阜県の祭り・行事（岐阜県の祭り・行事総合調査報告書）』（岐阜県、2020年3月）
- * 「郷土芸能探訪 29: 真桑人形浄瑠璃」『文部科学教育通信』（2020年）

◆講義・講座等

- * 大学院音楽研究科：日本伝統音楽演習 e I・e III、e II・e IV
- * 2020.02.06 令和元年度第10回伝音セミナー「近世の雅楽譜を見る・聴く」

◆関連する口頭発表

- * 2019.07.13 大久保真利子・出口実紀「1930～40年代の日本における民謡の調査と録音—国際文化振興会レコードの特徴を中心に—」（日本音楽学会西日本支部第46回（通算397回）定例研究会、九州大学）
- * 2019.08.09 細田至紀・出口実紀「相愛大学伝統芸能コーディネーター育成プログラム」連続講座第5回「雅楽の公演活動を支える基盤—楽器編」（相愛大学本町学舎アンサンブルスタジオ）
- * 2019.09.28 2019年くさつ・歴史発見塾「風流踊りにみる音楽」（草津宿交流館）
- * 2019.12.15 志村聖子・大久保真利子・出口実紀「伝統芸能における継承の課題とマネジメント人材育成の方向性—大阪における雅楽を事例に—」（日本音楽芸術マネジメント学会第12回冬の研究大会、東京音楽大学）

◆現地調査等

- * 2019.04 岐阜県揖斐郡揖斐川町にて年中行事調査
奈良県葛城郡にて来迎会調査
- * 2019.06 宮城県図書館にて雅楽資料調査
- * 2019.10 和歌山県御坊市にて祭礼調査
- * 2019.12 岐阜県揖斐郡揖斐川町にて年中行事調査
- * 2020.01 岐阜県揖斐郡揖斐川町にて年中行事調査

◆関連する研究助成

* 公益財団法人戸部眞紀財団平成 30 年度研究助成 研究課題「近世の雅楽譜における記譜の特徴と系統に関する研究―奈良方の笛譜を中心に」(2018 年 9 月 1 日～2019 年 8 月 31 日)

◆その他

* 2019.11.21 京都市立芸術大学・ウィーン国立音楽大学 バロックオペラ「勇敢な婦人―細川ガラシャ―」(京都文化博物館)

遠藤 美奈「ハワイの日系仏教寺院で歌い継がれる讃仏歌の研究」

2019 年度は、国内及びハワイにおける讃仏歌の実践状況について資料・現地調査を行い、これまでにハワイで刊行(改版)し日曜礼拝等で活用されてきた楽譜集の収集に努めた。国内の本山における讃仏歌(仏教讃歌)の実践状況に関しては、浄土真宗本願寺派を例としてまとめ第 13 回中日国際音楽比較研究学会(中国:福州大学)で発表を行った。ハワイの現地調査では、浄土真宗本願寺派の Gatha Festival(ハワイ島)を参与観察したほか、浄土真宗本願寺派(4 版)、日蓮宗(1 版)、真言宗(2 版)のハワイで出版された楽譜集を確認することができ入手した。次年度は各宗派の収録曲の比較分析に取りかかる予定である。

また、讃仏歌(仏教讃歌)は、ハワイの 3 つの宗派で Gatha(s) と訳され親しまれていたが、現在の日蓮宗、真言宗では日常的及び特別な日程での実践を確認することはできなかった。一方で、浄土真宗本願寺派では翻訳による演唱と新たな創作が続いている。具体的な実践としては、ハワイ別院に設けられた音楽部会において、本山で毎年催されている音御堂演奏会の演目を翻訳するほか、み教えにかかわる演目を選択し時間をかけて翻訳し演唱していた。一部の地域では新たな創作が行われているものの、その演目が日本へ逆輸入されることはほとんどないことがわかった。そのほか、2 年に 1 度ハワイ諸島の各寺院のメンバーがオアフ島のハワイ別院へ参集して Choral fest を催し、ルーツと広がりを持続している。

ハワイ諸島を相対的に眺めると、各宗派の実践についての詳細は導入期から定着とその後の展開には大

きな差が見られる。このことから、宗派ごとの讃仏歌(仏教讃歌)の用いられ方や教義的な必要性を加味しながら、その変遷に注視して分析していきたい。

加えて、これまでの研究活動をふまえ、沖縄県内における民俗芸能実践やその継承に関する調査及び本土大衆文化からの芸能実践への影響(研究代表:16K16749 及び 19K1299)についても調査を行った。関連して第 7 回伝音セミナーでは、最新の三線研究の成果をふまえ、三線職人によるレクチャーと実演家の演奏によって、その音色の体験をしていただいた。研究者や実演家のみならず、これまでの研究視点で見落としがちであった職人による「技」の歴史的な追求の一側面を提供できたと考えている。

◆講義・講座等

* 大学院音楽研究科:日本伝統音楽演習

* 2019.11.7 令和元年度第 7 回伝音セミナー「[琉球]の音色を聴く:王朝時代と現代の三線弾き聴き比べ」(仲嶺幹:沖縄県三線製作事業協同組合事務局長、喜納吏一:野村流音楽協会師範)

* 沖縄県立芸術大学音楽学部非常勤講師(「課題演習(修士副論文)」「琉球芸能史」「琉球芸能文化論」)

◆関連する口頭発表

* 2019.10.19 「アメリカ統治下の沖縄における本土式盆踊りの実践をめぐって-「琉米文化会館」「将校クラブ」「沖縄全島エイサーコンクール」を中心に-」日本音楽学会第 70 回全国大会(於:大阪大学)

* 2019.11.24 「ハワイにおける日系仏教の讃仏歌の現状」第 13 回中日音楽比較研究国際学術シンポジウム(中国:福州大学)

◆現地調査等

2019 年 6 月から 2020 年 3 月

浄土真宗本願寺派総合研究所仏教音楽・儀礼研究室にて資料等調査

2020 年 2 月 ハワイオアフ島及びハワイ島にて讃仏歌に関する資料等調査

◆関連する研究助成

* 研究代表:若手研究(B)16K16749「本土大衆文化の影響にみる近現代沖縄の盆踊りに関する基礎的研究」(2016 年度から 2019 年※延長)

* 研究代表:若手研究 19K12992「本土大衆文化の影響にみる近現代沖縄の「盆踊り」の発展的研究」(2019 年度から 2022 年度)

* 研究分担者:基盤研究(C)19K00160「越境する日本の仏教音楽 宗教・文化・精神のグローバル化」(2019 年度から 2021 年度) 研究代表者:GILLAN Matthew(国際基督教大学教授)

◆その他

* 書評 塚田健一『エイサー物語:移動する人、伝播する芸能』(世界思想社,2019)、沖縄タイムス社、2019 年 5 月 25 日付

* 遠藤美奈編、波照間永吉監修『西表島 古見結願祭工四

ぶどうり・狂言』（古見公民館,2020年2月）。

- * 座談会「地域と芸能のこれからを考える」（平成31年度沖縄文化芸術を支える環境形成推進事業）主催：沖縄県、（公財）沖縄県文化振興会、於：平良港ターミナルビル（2019年12月2日）
- * 2019.11.17 共同発表『琉球箏曲歌物の形成と関連歌の広がり』『琉球箏曲《船頭節》と類歌関連歌謡の旋律比較と《対馬節》について』東洋音楽学会第70回全国大会（於：京都市立芸術大学）

大西 秀紀「令和元年度伝音セミナー使用曲」

令和元年度の「伝音セミナー 日本の希少音楽資源にふれる（全10回）」において、報告者は第1回を担当した。その内容は次の通りである（なお当初は第11回「京都のうた（その6）聴く都をどり」を3月5日に担当の予定だったが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため次年度に延期となった）。

○第1回 京都のうた（その5）2019.05.09

「京都のうた」の5回目は、祇園甲部芸妓による「西京名所」「さくら音頭」や、「同志社大学校歌（大中寅二作曲）」「京都高等工芸学校々歌（現京都工芸繊維大学）」など京都の学校校歌、「亀岡音頭」「板橋婦人会の歌」など京都府市の地域の唄、川下りで賑わう保津峡に行く蒸気機関車D51・C54の響きなどをお聴きいただきます（広報チラシより）。

〈使用した音源〉

- 1 京都高等工芸学校々歌 唄・伊藤久男 コロムビア A139-A（昭和8年頃制作カ）
- 2 同志社ソング（部分）指揮・大中寅二 合唱・同志社卒業生有志 エヂソン E-874（昭和10年制作カ）
- 3 同志社大学々歌（部分）唄・中野忠晴、コロムビア合唱団 コロムビア A272（昭和10年制作カ）
- 4 同志社校歌 唄・同志社卒業生有志 指揮・大中寅二 エヂソン E-873（昭和10年制作カ）
- 5 管弦楽 同志社大学々歌 コロムビア・オーケストラ コロムビア A272（昭和10年制作カ）
- 6 西京名所 祇園新地 唄・市助 三・若種 オリエント A117（大正2年）
- 7 新小唄 京都麗春譜 さくら音頭 京都祇園甲部唄・君之助 三・梅春、小きし タイヘイ

M783-A（昭和8年カ）

- 8 たかなわ旅館館内放送用レコード 日本マージョリー 番号なし（昭和30年頃制作カ）
- 9 亀岡音頭 唄・美ち奴、真木富二夫 上野山正男と其の楽団 日本放送録音 PB144-A（昭和27-8年頃制作カ）
- 10 舟遊びの保津峡に行く〈C54・D51〉 ビクター SGC-130（昭和46年3月発売）
- 11 板橋婦人会の歌 伏見混声合唱団女声合唱 日本録音文化協会 H2267-A（昭和31-3年頃制作カ）
- 12 京都市市民憲章の歌 講演 京都市長 高山義三 日本録音文化協会 H2124-B（昭和31年制作カ）
- 13 混声合唱 京都市歌 京都市立堀川高等学校音楽専攻並二音楽コーラス テイチク P-74（昭和26年制作）

◆関連した執筆

* 2019.10 「演芸関係のSPレコード文献資料について」『大阪府立上方演芸資料館 平成30年度年報』、大阪府立上方演芸資料館

* 2020.01 「先代竹本綴太夫のレコード」『第157回 開場35周年記念 文楽公演プログラム』、国立文楽劇場

◆関連した口頭発表

* 2019.04.28 「大阪の声と唄 二代目三木助のレコードを中心に」、大阪芸能懇話会、大阪市立難波市民学習センター

神津 武男「人形浄瑠璃文楽の近世後期上演記録データベース更新に係る追補的資料研究」

本年度の日本伝統音楽研究センターでの活動は、第一には当センターの委託研究「西村コレクションの書誌的研究と書目作成」について取り組んだことである。当該委託研究では、西村公一氏（大阪府豊中市在住）所蔵の日本音楽関係資料（以下「西村コレクション」と仮称する）について、書誌的研究およびデータ

ベース作成に向けた基礎的調査を進めた。「西村コレクション」は、江戸時代から大正時代頃までの日本音楽関係の和装本を収集したものである。大量であること、日本伝統音楽の多岐にわたる分野をカバーしていること、日本音楽研究の基礎的資料を多く含むことが特色である。伝音センターにおいてこの貴重なコレクションのデジタル化公開を進め、日本音楽研究の進展に大きな役割を果たすことが最終的な目標である。

2015年9月13日・徳島市立徳島城博物館での筆者の講座「浄瑠璃本のベストセラー」を、西村氏が聴講されたことを接点として、西村氏に大規模な蔵書群のあることを筆者は把握するに至った。筆者は翌2016年に科研費・研究活動スタート支援の採択を得て、研究課題「人形浄瑠璃文楽の近世後期上演記録データベース更新に係る追補的資料研究」(研究課題／領域番号16H07120。2016－2017年度)に取り組み、「西村コレクション」の内、義太夫節の浄瑠璃本(通し本)の整理に着手した。

調査の折々に、西村公一氏の資料の保存と学術利用についての御意志を伺ったところ、

- ・ひとまとりで永く保存して欲しいこと
- ・ひろく公開して欲しいこと

を基本として、将来において資料の寄贈を考えているとお話だった。

ジャンルとしては浄瑠璃本が大きいものの、コレクションの全体としては日本音楽関係の多ジャンルにわたっていることが受入機関を自ずから狭めることになる、と筆者は考えた。山田智恵子氏へ御相談したところ、「伝音センターならば整理出来るのではないか」として、竹内有一氏と御検討くださった。このことの見通しを筆者から西村氏へお伝えしたところから、伝音センターへの資料寄託という道筋が拓けたものである。2017年度末に上記科研費の間接経費を以て、日本音楽関係資料について、伝音センターへ移動させたものである。

追加して移管した分も合わせて、段ボール箱21箱を伝音センターではお預かりしているが、これらについて箱ごとに資料点数を数え、おおよその資料の内容を把握することを進めた。結果、日本伝統音楽関係資料の総数を3,454点と数えたものである。このほか

に筆者の整理した義太夫節の通し本・道行揃が611点あって、また未整理の義太夫節の抜き本が残るので、総計は4千数百点に及ぶものと推定している。

これらの数値・概要を基に、竹内有一氏は自身を研究代表者とする研究課題「新出コレクション「西村公一文庫」の目録作成と江戸時代の日本伝統音楽の資料学的研究」の科研費申請を行い、2020年4月に採択された。今後は、筆者も研究分担者として、「西村公一文庫」の調査研究を発展させ、将来のデジタル化公開を視野に入れた写真撮影、データベース作成などを進める予定である。

また浄瑠璃本所在調査・書誌研究の成果として、文楽・義太夫節の現行曲『壇浦兜軍記』三段目口「琴責の段」の上演本文と曲風の成立過程に関して論文をまとめた。従来関与の指摘されてこなかった初代豊竹麓太夫の関わりを推定したものである。加えて劇書『楽屋図会拾遺』の刊行年を、通説の享和2年は誤りで、享和4年＝文化元年であることを『大坂本屋仲間記録』に基づいて考証するなどした。

◆関連する執筆

* 「『壇浦兜軍記』三段目口「琴責の段」の現行本文と曲風の成立時期について―竹本大和掾と初代豊竹駒太夫、初代豊竹麓太夫の影響―」(『早稲田大学高等研究所紀要』第12号、早稲田大学高等研究所、2020年3月所収)。

https://www.waseda.jp/inst/wias/assets/uploads/2020/03/RB012_136-184.pdf

高橋 葉子 能の略式演奏に関する 研究報告書の作成と音曲伝書の読解

1、科学研究費助成事業研究(基盤研究C)「能の略式演奏の歴史と現在―新しい演出形態を構想するために」(平成28～31年度。研究分担者藤田隆則)では、最終年度の研究として次の二点を行った。

①初年度から三年度にかけて行った能楽愛好家へのインタビューから三家族の談話をまとめ、資料と考察を加えて、研究報告書『京都の能楽愛好家』(高橋・藤田隆則共編、B5版72頁)を刊行した。収録した談話からは、明治末年から昭和前期の能楽大衆化の時代や、昭和後半から平成前半の能楽盛況の時代それぞれ

れにおける、京都ならではの愛好者の環境と活動ぶりを知ることができる。能は歴史上どの時代においても、謡や囃子などの略式演奏や自由な省略型の演能により、愛好者自身が演じて楽しむ芸能として発展した。近代においては市民が稽古事として習い親しむことにより、普及と経済的支援の両方を得て隆盛した。報告書では、京都の呉服産業と能楽界のかかわりや、社交ツールとしての能（職場の謡会）、略式演奏の場（家族囃子会）と展開（家族能、薪能寄進、謡や舞の継続的な奉納）などを紹介し、近現代の京都における略式演奏の実際と愛好家活動の特色を明らかにした。補説として近代の能楽愛好家に関する出版物一覧を掲載した。現在の能楽界では、愛好家がすなわち素人弟子であった構造が大きく変化し、愛好家のパトロン性も衰退している。また略式演奏・演能の形態も急速に多様化している。この報告書は、京都の能楽の貴重な記録であるだけでなく、変わりゆく能楽の将来を考える上でも有意義な資料となるだろう。

②略式演奏の歴史的技法的研究として、『金春家太鼓秘書』を解説し、金春流太鼓一調一管〈唐船〉の冒頭部における江戸期の伝承内容と現行奏法の問題点についてまとめ、太鼓金春流宗家に提供した。太鼓の拍節感と奏法の関係について、研究事例を広げて改めて発表したい。

2、プロジェクト研究「音曲技法書（伝書）の総合的研究」（代表者藤田隆則）では、昨年度に引き続き謡伝書『うたひ鏡』の講読を行った。室町末期から江戸初期にかけて多くの謡伝書が書かれ、版行された大著も少なくないが、この『うたひ鏡』には「呂律」と五声（宮商角徴羽）の独自の用法など伝統的な用語に対する別解釈が目立っている。他書に類のない内容と個性的な文章表現の多い点が興味深い。新年度も講読を継続し、全巻の翻刻と注釈の作成に向かいたい。また当研究会と連動して、令和二年度から謡伝書の項目分類および謡伝書用語の注釈作業を科研費研究として行う予定である。

◆書籍

- * 2020.03『京都の能楽愛好家』（藤田隆則と共編）科学研究費助成事業基盤研究（C）課題番号 16K02245 研究課題「能の略式演奏の歴史と現在―新しい演出形態を構想す

るために」研究報告書

◆関連する執筆

- * 2019.06「明治の音源に聞く謡のフシー大西新三郎〈小督〉駒之段」『京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター研究紀要』第16号

- * 2019.10「京都観世会浅野文庫資料紹介（三）―檜垣本彦四郎笛伝書」京都観世会館会報誌『能』第737号

◆書評・書籍紹介等

- * 2019.05 書評「森田都紀著『能管の演奏技法と伝承』」『楽劇学』第26号

- * 2019.12 書籍紹介「片山幽雪ほか著『無辺光 片山幽雪問書』」『成城教育』第186号

- * 2020.01「京都の能」京都観世会館会報誌『能』第740号

◆口頭発表

- * 2019.07「平成の楽劇―能・狂言」（羽田昶との共同発表）楽劇学会第27回大会

◆講座

- * 2019.8「囃す！ 能・狂言カルテット 笛之巻」（竹市学氏との対談）武蔵野大学能楽資料センター公開講座

- * 2019.8「囃す！ 能・狂言カルテット 大鼓之巻」（柿原崇志氏との対談）武蔵野大学能楽資料センター公開講座

◆関連する共同研究

- * 科学研究費助成事業 基盤研究（C）課題番号 16K02336 研究課題「能楽囃子太鼓方観世流に見る伝授と受容の諸相―『入門者摘録』研究」研究協力者（研究代表者三浦裕子）

- * 成城大学民俗学研究所共同研究事業「浅野太左衛門家旧蔵資料の総合的研究」研究協力者（研究代表者：大谷節子）

- * 法政大学能楽研究所拠点研究「能の映像にそえる記譜の研究」研究分担者（研究代表者：藤田隆則）

- * 法政大学能楽研究所拠点研究「室町中後期能楽伝書の資料集作成と室町文化の継承史・社会史に関する学際的研究」研究分担者（研究代表者：重田みち）

丹羽 幸江 「世阿弥・禅竹の自筆譜の解読を中心とした室町期の旋律法と能の復曲《和田酒盛》の始動」

1、「創生期の能の音楽における歌詞の伝達に適した旋律法」

研究課題「創生期の能の音楽における歌詞の伝達に適した旋律法」（科学研究費基盤C、2018～2020年度予定）の2年目の研究を行った。語り物音楽として初めての本格的な劇場芸術である能の当初の旋律法の特徴を明らかにすることを目的とする。従来、世阿弥の時代の謡についてはリズム面の研究が進んできたのに対し、本研究は旋律面に光を当てる。2019年度には旋律研究の方法論の模索と、世阿弥・禅竹の自筆譜の解読の2方面からアプローチした。

まず、能が確立した旋律法を探るために、よりの確に言葉を伝えるための旋律パターンとは何かを考察したのが、国際学会での研究発表“Melody ingenuity to convey the story in *Noh* Theatre” (European Association for Japanese Studies、略称 EAJS、於筑波大学、2020 年 9 月) である。歌披講や講式を取り上げ、能との旋律の比較を行った。歌披講では七五調の和歌の読み上げ方が、上半句・下半句とで音域を変化させて明瞭に歌い分ける旋律パターンを持つ。一方、仏教声明の講式の散文の詞章では、一句を単位とする旋律パターンが見られない。このことから能の旋律パターンが七五調に依存し、半句をはっきりと弁別するパターンを持つのが特徴であるとした。

つぎに、論文「世阿弥・禅竹自筆譜への早歌譜の影響——リズム記号「振り」の摂取」(昭和音楽大学研究紀要 38 号、2020 年 3 月) では、18 年の学会での研究発表を発展させ、リズム記号に関して禅竹・世阿弥自筆譜の解読を行なった。従来、能の地拍子への先行芸能である早歌からの影響が知られているが、楽譜への音楽の記し方に関しても謡の譜への早歌譜の明確な影響関係が裏付けられた。

これまで世阿弥・禅竹の自筆譜は後世の謡の楽譜記号との類似性から論じられることが多かったため、現在とは異なった記号の機能についてはわかっていないことが多い。禅竹・世阿弥自筆譜では、早歌においてリズム記号として用いられている「振り」と同じの記号が、早歌と同様に強拍でのモチ（音を伸ばす）の機能を持つことを指摘した。

さらに世阿弥自筆譜を精査する中で、世阿弥の記譜法には大きく分けて 2 つの段階があることがわかった。これまで、自筆譜の記譜方法の変遷は知られていない。まず「ノブル」「フル」など動詞形の指示記号によって謡い方を指示する《雲林院》までの前期の 4 曲と、「薙」など漢字一文字の記号を多用する《松浦》以降の後期の 4 曲に分けられる。

今後、世阿弥自筆譜の後期の《松浦》など特に早歌からの記号の使用法の影響を強く受けたと考えられる曲について、旋律面での楽譜記号を取り上げ、本研究の完成を目指す。

2、能の復曲活動

神奈川県平塚市文化財団主催の湘南ひらつか能・狂言において能楽師加藤眞悟氏を中心とする平塚市の歴史にまつわる能を復曲する活動に関わっている。平塚市はかつて鎌倉幕府が開かれた地、鎌倉に隣接する旧東海道の宿場町にあるため、これまで《真田》《伏木曾我》《虎送》と鎌倉幕府やその周辺の人物についての能が復曲された。新たな復曲として、曾我物語の中のハイライトシーンの一つをテーマとする《和田酒盛》の 2021 年 3 月の復曲上演が決定され、謡本の選定や節付の検討といった復曲活動を行なった。

また藤田隆則教授の企画による京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター第 55 回公開講座「語りの立体化——そして 復曲—狂言、能、題目立」(一般社団法人東洋音楽学会令和元年度開講演会と共催、於京都市立芸術大学) において、2014 年に復曲した《真田》が部分的に再演された。筆者は《真田》の物語の紹介と、復曲の意義について解説を行った。《真田》が廃絶されたのは、素謡という演奏形態が好まれなくなったことが要因と考えられ、必ずしも人々に愛好されなくなった曲だけが廃れるわけではないことを論じた。

◆関連する執筆

- * 2020.3 論文「世阿弥・禅竹自筆譜への早歌譜の影響——リズム記号「振り」の摂取」昭和音楽大学研究紀要 38 号、76-87 頁。
- * 2019.11 解説「能《真田》の復曲過程」、『語りの立体化——そして 復曲—狂言、能、題目立』本学日本伝統音楽研究センター第 55 回公開講座パンフレット、4-6 頁。

◆関連する口頭発表

- * 2019.9 “Melody ingenuity to convey the story in *Noh* Theatre”, EAJS (European Association for Japanese Studies), 於筑波大学。
- * 2019.11 「能《真田》の復曲過程」本学日本伝統音楽研究センター第 55 回公開講座